明治三十七年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十八年八月二十七日毎月一回一日発行（毎月一回一日発行）
昭和十八年九月一日発行　第五百八十二號

目次

修養の大要（二）……本多日生
立正安國論講話（第一講了）……小林一郎
啓發錄……橋本左內
記事
○本部團報　○福島教信　○入幾報告

第四十八年　九月號

財團法人
統一團發行

財團法人 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正眼ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正眼ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ淵邃　活動ノ旺盛此等ハ統一團ノ標語ナリ

茲ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に願望スル所ナリ

本團器則

□目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正眼ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ振興ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

□維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

□賛助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス

□正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルル方ヲ正團員トス

□入團　御希望ノ方ハ貴所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス

□賛友　統一誌ヲ贊護スル方ヲ誌友トス

修養の大要（二）

本多日生

結人は人生に於ける平和の神とも言はれるので、ちようど櫻の花が咲いて居るやうな愉快な感じを與へるものが結人の天分である。然るにそれが今言ふやうに不愉快を人に與へることになつては、櫻の花は宜いけれども、惡い臭ひを發するやうな譯で、結人がさういふ自分の不愉快な感じを周圍に發散する結果、折角愉快であるべき家庭、結人に依つて慰められるべき家庭が、結人に依つて苦痛を增加するといふやうな事がありはしないか、これは餘程大事な點である。

であるからどうしても物の考へ方を一轉して行くといふことが必要である。結人にも神經質の人とそれから膽汁質の人――樂天的の人がある。膽汁質の人といふものは、物事をあまり考へないし、さうして物事を氣にしない性質の人である。先づ結人はあまり神經質にならぬ方が宜いといふことが言へると思ふ。あまりボカンとされて居つても困るけれども、併しまアどちらかと言へば、少しはボンヤリして居つても、あまりやかましくキヤンキヤン言はない方が宜くはないかと思ふ。

この事は聖人の教に於ては非常に大切なことに考へられて居るので、孟子はこれを存養と申して居る。『其の心を存し、其の性を養ふ』と言つて、存といふのは精神能力を保存することである。養は精神の力を養ふことである、無駄遣ひをせぬやうに、さうして力の殖えて行くやうにする。ちようど前に申した、石油をあまり使はないで、要らない時には消して置いて、又石油を時々買込んで、何時でもランプに補充の出來るやうにして置く、盜所に行つて見ても補

充すべき石油は無い、ランプは座敷で無駄な時分にどんどん燃えて居るといふことになれば、どうしても後で困る譯である。精神能力を養ふといふことをしないで無駄に使つて行けば、後に殘るものは疲れ果てたる精神で、大事な時分には働けない。さうすると事に當つて勇氣といふものが無くなり、膽力といふものが無くなるのである。

そこでその存養といふことを圖るにはどうするかと言へば、『故心を求むるのみ』と申して、いろいろの事を考へるのをやめるといふことである。故心を求むといふのは、心が遊びに出るのを引張つて戻して來るやうな意味を言うて居る。昔の繪には猿が馬の手綱を引締めて居る繪が描いてあるが、意馬心猿と申して、こころが發して馬のやうに暴れて飛出さうとするのを、猿が手綱を引張つて居るところが書いてあるが、馬もこころ、猿もこころで、同じ自分のこころだけれども、その一方のつまらぬ意が跳出さうとするのを、善い心の方で手綱を引締めるといふやうな意味になる。

心こそ心まよはす心なれ　心にこころ心ゆるすな

といふ歌があるやうに、この心の手綱を引締めて無駄の方に行かないやうにして行くのである。

そこで先づ今日のやうな會合にでも集つたならば、人生を超越するといふことを考へなければいかぬ。人生を超越するといふことは大變むづかしい事のやうだけれども、悲しい事も嬉しい事もくだらない事も一切を考へないで、雲の上にでも昇つたやうに、自分が人生に處するといふことを忘れて、さうして前にお佛壇があり、周圍に美しい庭園があるとするならば、これを假に靈鷲山と考へて見るのである。日蓮聖人はさうは考へられなかつた。『誠に身延山の栖は千早振る神も惠みを垂れ天下りましますらん、こころ無き賤の男、賤の女までも心を留めぬべし。哀れを催す秋の暮には草の庵に露深く、檜にすだく蜘蛛の糸玉を連ぬき、紅葉何時しか色深うして、たえだえに傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田川の水上も斯くやと疑はれぬ――』ああ何とも言へぬ結構な所である。天竺の靈鷲山、佛の法を說き給ひしところは本朝この身延の峰か

たちわたる身のうき雲もはれぬべし　たえのみのりの鷲の山風

とお考へになると、雪深き淋しい身延の山が非常に愉快な所になつて來る。人間はさういふ考を時々有たなければいかぬ。何時でもくだらない人生の煩悶の中に沒頭して居つては駄目である。時には人生のさういふ境界を超說して、大に精神の力を養ふといふことがなければならぬ。

二宮尊德翁が言つて居ることに、人間が世の中に暮して行くのは、川の中にある水車の如く、半分は水の中につかつて居らなければならぬけれども、半分は水の上に出なければいかぬ、全部水の中につかつたならば水車は流れてしまつて役に立たないといふことを言つて居るが、これは餘程面白い言ひ方であると思ふ。人生からまるつ切り離れてしまつてはいかぬから、日常の事はしなければならぬけれども、併し時に半分は人生を超越する所がなければならぬ。その時には貧乏も金持も不平も心配も何も無いのである。貧乏で困るとか、夫が性が惡いとか、姑がやかましくて困るとかいふやうなことを超越してしまつて、その半分は水の上の綺麗な生活に移すやうに心懸ける。斯ういふことに依つて精神の無駄遣ひといふものが減つて來る。氣持良き生活が開かれるのである。それを無理に何でもかんでも水の中に頭を突込んで暮すやうになれば、何時でも苦勞が絶えない。少しでも暇があれば惡い方の事ばかり考へて、あの時分にあの人がこんな事を言つたとか、あの時の夫の態度がどうも氣に喰はぬとか、それからそれへと心持の惡い事を列べ立てて來る。さうするとそれがたびたび繰返されるものであるから、だんだん記憶が明瞭になつて感じが深刻になつて來る。一つ考へ出せば次から次と、ちようど活動寫眞の映畫のやうに、いくらでも展開して來る。第一卷が終れば第二卷といふやうな具合に、嫌な事がそれからそれへと出て來たならば、しまひには如何なる精神の强い人でもグツタリしてしまふ。

それが婦人には割合に多い、婦人は憂愁性といふものを有つて居るので、それは心ばかりではない、身體の關係からも來るのであるが、それが女子に就ては最も警戒すべき事である。女子は常に自ら快活の方へ、快活の方へと注意を拂つて行かなければ、兎角憂愁性に陷り易い。お婆さんなどになつてニコニコ笑つて居るといふのは餘程偉い人で先づ大抵の人がお婆さんにでもなつたならば、もう物も言はぬ中から額に皺を寄せて、癇癪がむくむくして居るといふやうなのが普通の狀態である。

それはまあ人生といふものは大體さういふ具合になつて居るので、餘程我慢はして居るけれども、嫌やなやうな事が次から次と頭に響いて來るのである。考へやうに依つては人生はさういふ缺陷があるのであるけれども、そこを一つ自分の精神力を以て轉じて行くのである。境は心にしたがつて轉ずると申して、同じものでも自分の心の力に依つてそれを一轉することが出來る。同じものを見ても、自分の精神に依つて不愉快にも感ずれば快樂にも感ぜられて來るのであつて、精神といふものは非常に妙な力を有つて居るものである。であるから心を養うてさういふ無駄遣ひをせぬやうに注意して行かなければならない。

お釋迦様もそれが爲に最初に安般といふことを說かれて居る。これは梵語であるが、譯すれば休息或は安息と言つても宜い。精神の休息といふ意味である。心を無駄に使はないやうに休息を與へるといふことを敎へられるのである。その方法は數息と申して、息を數へることを敎へられて居るのであつて、自分の吐く息を數へて行く、さうして息に長い短かいの無いやうにこれを整へて行く、精神が動搖して居つたら息がフウツフウツとなつて、長い短いが激しく違つて來る。これが落着くといふとちやんと息の寸法もきまつて來る。精神の動搖の激しいほど息は激しくなる芝居でも人殺しをして血刀を提げて出て來たやうな時には、腹をペコペコさして肩を慄はせてフウフウと息をして居る。これは最も精神の激動を現して居る。赤ん坊がスヤスヤと無心に寢て居る時には、息をして居るのかして居ないのかわからぬやうな狀態である。これが最も精神の極度に平靜に歸して居る狀態である。これは鼻の先に眞綿を持つて行つて試して見ると直ぐわかる。お祖母さんならお祖母さんの寢て居る所にやつて見れば、今夜はお祖母さんが氣持良く寢て居るかどうかといふことが能くわかる。靜に氣持の良い夢でも見て寢て居る時には、眞綿が少ししか動かない、何かむしやくしやした事でもあつて、癇癪を起して寢たやうな時にはフウツフウツと眞綿が二尺も二尺五寸も動く、『ああ大分今夜は鼻息が荒いナ』といふことになる。それがまあ八寸か一尺ぐらゐであるならば、『今夜はお祖母さんが良い氣持で寢てござる』といふことになる。これは不斷から成るべく自分の息を整へるやうに始終心懸けて居るならば、そんなに眞綿などを持つて來なくても、自分の息が整つたか整はぬかといふことは直ぐわかる。それを佛樣はやれと仰しやつて居る。一から順々に十まで數へて、又十から一に戻つて息を數へるといふやり方が昔から行はれて居りますが、これは息でなくとも宜しい、珠數を數へたりするやうなことでも、これは皆な精神を散亂せしめないやうにして行く手段である。あまりものを面倒に考へないで精神を休養する爲にするのである。お經を讀んだりお題目を繰返したりするのも、覺えて居ることで別段精神を働かせなくとも宜しい、精神を休養せしめることになる。心を落着けて靜に題目を繰返して唱へて居れば、良い心持になつて、さうして同じ事を繰返すのであるから、精神は休まつて回復して來るのである。さういふ事が佛敎には餘程强く敎へられて居る。坐禪をするとかいふやうなことも、皆やはり精神の休養を敎へられて居るのであつて、この精神の休養が十分出來て居れば、人間はいよいよの時分にしつかりした力が現れて來るものである。

それ故に何事よりも心の無駄遣ひを注意しなければならない。これに就て『捨心』といふことを申すのである。或は『能捨の心』とも言ふ。能く捨てるといふのは、世間の言葉で言へば、その事の考を打切つてしまふのである。一つの事を無暗に考へて嫌やな氣持になる、その事柄をすつかり忘れてしまふやうにするのが捨心といふことである。『もうあの事は考へても得はない、あの話の順序を考へて行くといつも氣持が惡くなる』といふやうな事柄は、古新聞にでも包んで掃溜に捨ててしまふのである。ところがそれを大事に絹の風呂敷に包み、床の間に飾つて置くやうな

ことをして、又拔けて見、又拔けて見するから、何時でも嫌やな氣持が出て來る。そんな嫌やな事は捨ててしまへといふことを說かれて居るのである。慈悲喜捨の四無量心といつて、慈悲の心、喜の心と併せて大事な四つの心の中に捨てる心といふものを敎へられて居る。

昔から偉い人は斯ういふことは口ではやかましく言はぬけれども、自然に行爲がさうなつて居る。西鄕隆盛といふやうな人に就て考へて見ても、嫌やなやうなことは最初から捨てて騷つて居る。必ず相當偉いと言はれる人はつまらぬ事は切つて捨てる。商人でも私は或る成功した商人の話を聽いたことがあるが、損をした事は考へてはいかぬと言つて居る。普通の商人は『ああ損をしたから働かなければならぬ、損をした、損をした』と言つて、損をしたといふことを以て刺戟するやうに考へに居るけれども、成功する商人は、損したやうなことを考へては氣が腐つて駄目だといふ、『去年は八千圓損をした、ああ八千圓取返すにはこの不景氣に容易な事ではない』と思へば、氣が減入つてしまふ。そこで損といふやうなことは考へない。今日は百圓儲かつたといふ場合に、『去年八千圓も損したのに、百圓ぐらゐ儲けたつて何もなりはせぬ』……斯う思つてはいかぬ。『百圓儲かつた、うまいぞ、この調子だ』といふ風に元氣を附けてやつて行かなければならぬ。損は一遍限り忘れてしまはなければ駄目だといふことを言つて居つた。別に學問をした人でもないが、或る成功した商人の親爺がさういふことを言つて居つたが、自然の眞理がその中に含まれて居ると思ふ。成功して行くぐらゐの人間は何處か違つた所がある。やはり心を切捨てて行くといふことに依つて精神力が養はれて行くといふことは明かである。ところが割合に普通の人は損をした事ばかり考へて、殊に婦人などは、『あなた少しばかり儲けたところが、去年損をして居るぢやありませんか』と言つて、損の事ばかり言ふやうな事があり過ぎはしないか、さうすれば人は疲れるばかりである。何時も良い氣分の方に向けて精神力を回復して行くことが修養の第一着手である。

それから第二には身體の健康、今日の所謂保健衞生といふことである。健康を保持するといふことは非常に大事で

精神修養といふけれども、人間の精神といふものは身體を離れて別にあるのではない。始終身體の影響を受けて居るのである。佛敎で申しても色心不二といふ位のもので、身と心といふものは少しも離れないものであるから、身體が病弱であれば精神もその影ひを受ける。頭痛がするといふことになれば心持もはつきりしない。熱があるといふことになれば精神の働きが鈍る、或は胃が悪くて食べた物が胸に閊へて居るといふことになれば、やはり精神が鬱陶しくなる。だから身體を健康にして置かなかつたならば、精神は爽快に働き得ない關係にあるものであるといふことは頗る明瞭である。

ちようど身體と精神とは、船とその船に乘つて居る人といふか、自動車と自動車に乘つて居る人見たやうな關係のものである。ガタ自動車に乘つて居れば乘つて居る人間もやはりガタガタして氣持がいらいらして來る。船が壞れて居るとか、非常にか弱い船に乘つて居れば、乘つて居る人も危險を感じて落着かないと同じものである。それも小さな川を渡るくらゐならば少々粗末な船でかまはぬけれども、遠洋航海をやるといふことになれば、十分船を注意しないと、折角出懸けても途中で沈沒してしまふ。『もうこの船なら壞れることがはつきりわかつて居るといふやうな、壞れかけた船に乘つてこれから南洋に行かうなどと考へるよりは、そんな船は寧ろ乘出さずに岸に繫いで置いた方が宜いといふことになる。人間が志を立てて世に處して行くといふに就ては、第一に身體の健康に注意して、この船はどれだけの海が乘り切れるか、この自動車はどの位の道に耐へるかといふことを考へなければならぬ。ボロ自動車でタイヤーは腐れ懸けて居る、一哩も走ればパンクしてしまふといふやうな車を乘り出して、それで自動車旅行を續けて下の關まで行かうといふやうなことを思ひ立つて、大森まで行つたところがパンクしてしまつた、それでは實に愚なことであるから、身體の健康といふことは餘程大事に考へなければならぬ。

併し病弱に生れて居る人はさう言つてもなかなか思ふやうに行かぬ譯であるけれども、人間の體は弱く生れた者でも養生法に依つては相當健康を維持することが出來る。又病氣になつて居つても病氣を進すことも出來る。それは醫

藥ばかりではない。精神力といふものが非常な關係がある。 さうびくびくする必要がないといふことを修養の方では教へるのである。 體と心の關係は非常に不思議なもので、昔から信心をして病氣が癒つたといふ話は澤山あるが、それは尤もな事である。 肉體の爲の藥と精神の爲の信仰と相俟つて行きさへすれば、どんな病氣でも癒ると言つて宜い位のものである。 よくよくの者が死んで行くのであつて、強い信念と適當な藥とを持つて行けば大抵の病氣は癒るものである。 今名古屋で醫者をして居る石田誠といふ人がある。 獨逸の最も新しい學術を研究して居る醫學博士でありますが、 熱心な日蓮主義者で、 名古屋の教化會館の附屬事業として今度病院を開始して居るのでありますが、この人の話に依ると、醫學上の研究から行つた結果と宗教上の考とぴつたり合ふのであります。 肺病などは世間では癒らぬ癒らぬと言つて居るけれども、さうではないので、やはり精神に確かりした信念を有てば大部分癒る、早く注意さへすれば殆ど全部癒るさうであります。 その他の病氣も殆ど病氣として癒らぬといふものはない位に、信仰と醫藥とを以てすれば病氣は癒る。それを『ああ病氣になつた、大變だ』斯う思つてしまふともう癒らない。『ナーに自分の信念に依り、又醫藥に依つてこの病氣は癒る』といふ信念が確かりして居れば必ず癒るものであります。（つづく）

母に十德あり。一に大地と名く、母の胎中を所依と爲すが故に。二に能生と名く、衆苦を經歷して能く生ずるが故に。三に能正と名く、恆に母の手を以て五根をおさむるが故に。四に養育と名く、四時の宜に隨ひて能く長養するが故に。五に智者と名く、方便を以て智慧を生ずるが故に。六に莊嚴と名く、妙なる瓔珞を以て嚴飾するが故に。七に安隱と名く、母の懷抱を以て止息と爲すが故に。八に教授と名く、善巧方便もて子を導引するが故に、九に教誡と名く、善き言辭を以て衆惡を離れしむるが故に。十に興業と名く、能く家業を以て子に付囑するが故に。

——心地觀經——

立正安國論講話（第一講了）

小林一郎

正しい教を立てて人間の心の柱がつたのをまツ直ぐにする、さうすれば國が善くなる、斯ういふお考であります。果して聖德太子二十九箇年の御努力に依りまして日本の國は非常に盛んになつて、支那の南の方から興つて來た隋といふのが日本を壓迫しようとしても壓迫することが出來ない。又朝鮮が一度は日本に背いて支那にくツ付いたけれども、朝鮮の中の任那とか新羅といふ國は再び日本に使を送つて、これから始終日本に貢をするといふことを約束して來るといふやうな譯で、太子の二十九箇年間に國が非常に盛んになつた。その盛んになつたのは所謂三寶に歸する、佛の教に皆が歸依したからそれで皆が私の心を捨てて自分の仕事に全力を打込んでやるやうになつたので國が盛んになつた。斯ういふ生きた例がある。だから日蓮上人はこの事は固く信じて居らつしやる。正しい教を立てさへすれば國が善くなる、正しい教を立てないから國が亂れて行くといふことで、そこで正しい教を選ばなければならない。教といふものはちようど藥のやうなものだから、病氣に依つて藥を選ばなければならない。輕い病氣なら風邪藥を飲んでも宜いし、寶丹を飲んでも宜いし清心丹を飲んでも宜いが、重い病氣になつたらそんな賣藥ではいけない。良い醫者の本當に魂を打込んで調合した藥でなければ治らない。教もその通りであつて、何でも宜いといふものではない。世の中が非常に難かしくなつて來ると、いい加減な教では人間の心を建直すことは出來ない。世間には暢氣な人があつて、どうせ教といふものは惡いものではない、泥棒をしろの人殺しをしろのといふことを說いて居るのではないから、大概どれでも宜いではないかといふので手當り次第に信ずる人があるが、これはあぶない。病氣に藥はないで藥を選んだ日には仕樣がない。この間胃の惡い時に苦がい藥を飲んだら治つたからと言つて、頭の痛い時にその苦がい藥を飲んだところでそれは治りはしない。怪

我をした時に石炭酸で洗つたら治つた、今度風邪を引いたといふので石炭酸を飲んだら大變なことで咽喉を燒傷してしまふ。藥といふものが病氣といふものと相俟つて行くやうに、教といふものは世の中の狀態と相俟つて行かなければならぬ。それだから何を以て正しい教を選ぶかといふことは、教の內容と時代と國と一切を比べて決定をしなければならぬ。それで日蓮上人は二十年間の研究の結果として、法華經が一番お釋迦樣の御本意に合つた教であり、日本の國を救ふべき教であつて、末法の世の人間の心が極度に險惡になつた時に役に立つ教だといふことをしつかり確められて居らつしやるのだから、そこで立正安國とは卽ち法華經の教を世の中に立てることだ、斯ういふ事を北條氏に對して進言された譯であります。これは二十年間の研究の結果でありまして、決して日蓮上人が御自分で決めたのではない。それだから日蓮上人のこの二十年間の研究といふものが非常な强みであります。この前讀みました『開目鈔』の中にもその事は言つてある。

智者に我義破られずば用ひじ。

智慧の有る人が出て來て、お前の信仰は間違つて居る、と言はれて自分に間違つた事があつたら、いつでも止める。さういふ事が無い以上は政治上の迫害ぐらゐの事で

自分の信心を止めることをしないといふことを斷言して居る。これは研究の結果しつかり自分の信仰が定つて居るからである。正しい教とは何だ、無論法華經だ。お釋迦樣の魂を打込まれた、日本の國に最も適した末法の世に最も當嵌つた教は、これより外に善いものはないのだから、この法華經を世の中に弘めよう。それには先づ武家の者が動かなければならないが、その武家の棟梁が北條であるからその北條に對して反省を促さう、斯ういふことになるのであります。

ところが初めから法華經が善いといふやうなことを言つてもなかなか耳を傾けない。そこで立正安國論の中には、法華經の內容に就ての說明は殆どない。それは初めにお斷りして置きます。立正安國論を讀んだら法華經が解るだらうといふやうな人が、さういふ考で讀んだら立正安國論はつまらない。立正安國論の中には法華經の說明はない。ただ信仰が間違へば國が惡くなるぞといふことを、いろいろの經の言葉やいろいろの事實を以て證據立てるのが立正安國論であります。北條がこれを讀んで『ハハア、さうかナ、それでは法華經といふものはどんなものだらう、その法華經といふものを讀みたいナ』といふ心持が起れば、それで立正安國論を書いた趣意は達せられるのであります。それだから今度法華經を知りたいといふことになれば、又法華經に就ての別の說明が出て來る。兎にも角にも一番初めには、國民の信仰が間違ふと國はどんなにか祟りを受けるものだ、甚だしくなれば滅亡にも及ぶのだ、といふことを明にするといふ事が立正安國論の趣意であります。さうして自分は國を憂ふるの餘りこの法華經といふものを世の中に弘める爲に力を盡して居るのだといふことの名乘を擧げられた譯であります。

この時までに日本に弘まつた佛教は古いので八宗ある。奈良の末までに六宗、京都の初めになつて前に申した傳教・弘法の二人の方が出て天台宗と眞言宗が弘まつたからこれで八宗、それからその後に禪宗が出來、又念佛が出來たから、詰り日蓮上人の當時から言へば前にあつたのが八宗、新しく弘まつたのが二宗、合せて十宗であります。十だけの宗が日本に對立して居た譯だけれども、奈良の時代に弘まつた佛教はもう既に年を經て殆ど宗教としての勢力はない。實際の勢力があつたのは前に申した法然上人の念佛です。これは日蓮上人が法華經を弘める爲に起たれた時より凡そ九十年ばかり前の平家の盛んになる頃であります。これが一つ。それからその後になりまして禪が盛んになつて來た。尤も禪といふものは平家の一族の梶原景清といふ侍の叔父さんの大日ふ人が弘め始めて少しの勢力はあつたのでありますが、まだそれほど大きな勢力はない。ところが鎌倉時代の初めに榮西といふ人が支那に行つて臨濟宗の禪を習つて歸つて、それから後に道元といふ人が出て、この人が支那に行つて曹洞宗の禪を修めて歸つて來た。これは禪であります。それからその後良觀といふ人が鎌倉に來て、この人は京都邊りに居た人でありますが、鎌倉に來て鎌倉の極樂寺といふ所に住みまして、この人が律といふものを弘めた。『律』といふのは、奈良朝に一時榮えた奈良の大佛樣のあるお寺に戒壇がありまして、あそこで律を教へたものでありますが、一時非常に盛んであつたけれども、後には廢れて居つた。その廢れたのをこの良觀といふ人が又復興して、鎌倉で律を弘めて大分信者が出來た。それからもう一つは前の眞言宗でありますが、これは弘法大師以來ずつと傳はつて居るものであります。これは儀式が非常に立派で整つた宗旨でありますから、依然として相當な勢力はあつた。それで日蓮上人當時の佛教で先づ勢力のあるものと言ふと、この念佛と兩方を含めた禪と律と眞言の四つであります。あとは勢力は無いまあ難かしい教義は傳はつて居るけれども、生きた宗教としての勢力は無い。勢力の有つたのはこの四つだけであります。ところがこの四つの宗は何れも法華經は要ら

ないと言ふのです。だから日蓮上人はこの四つの宗に議論をなさるのです。日蓮上人といふ方は人の惡口を言つたり自分が新しく一派を開くといふそんな小さい考はない。法華經を弘めるのだから、法華經は要らないと言ふものは捨てて置く譯には行かない。法華經を弘めるのには法華經を排斥するものを押除けなければならぬ。邪魔をして居るものがあつたのでは法華經といふ大きなものは弘まらない。そこで念佛の方ではどう言つて法華經を嫌ふかといふと、法華經といふものは結構な教だけれども、世の中が末になつて來ると世の中が忙しくて人間に暇が無いから、そんな法華經といふ難かしい經を讀んで居ても迚ても解るものではない。それよりもそんなものは捨ててしまつてあとはもう阿彌陀樣をお頼みして極樂に往生することを求めなければならぬ、と斯う言ふ。決して法華經が惡いものではない。併し迚も忙しい世の中でそんなものは習つては居られないといふ意味で、念佛の方では法華經を排斥する。それだから法華經を信じてはいかぬと言ふ以上は、排斥する方の間違ひを直してやらなければ法華經は弘まらない譯であります。それから禪の方はどうかと言ふと、これは見性成佛で、お經なんといふものを讀んで理窟ばかり言つても仕樣がない。自分の心といふものを調べて見て坐禪して觀法して自分の心はどういふものだといふことを本當に考へて、解りさへすれば經典なんぞ讀まないでも宜い、斯ういふので法華經をつまらないと言ふ。法華經は無論經だから禪の方から言へば法華經を排斥する。これをその儘にして置く譯には行かない。それから律の方はどうかと言ふと、斯う世の中が末になつて來ると難かしい理窟を言はないで、佛樣の戒を守つて嘘を吐くなとか、泥棒をするなとか戒を守つて手近かなところをやつた方が宜からう、そんな難かしい理窟を言つても仕樣がない。法華經が惡いのではないけれども、難かし過ぎる。そんな難かしい理窟よりもまあ嘘を吐くなとか、酒を呑んで喧嘩をするなとか、泥棒をするなとかいふやうな手近かな方が宜いではないか、と言ふのが律であります。それから眞言の方は大日如來を拜むのでありますから、お釈迦樣などはつまらないものだ。お釈迦樣の一番善いお經だとして法華經をお說きになつた。それはお釈迦樣としては善いだらうけれども、大日如來はもつと上の佛樣だから法華經はつまらぬ、斯う言ふ。さういふ譯でこの四つの宗は何れも法華經を排斥する宗であります。だから法華經を弘める者としてはこの四つの宗の間違ひを直さうといふことに努力するのが當然であります。日蓮上人が他を攻擊するのではない。他が法華經を排斥するから、その排斥する間違ひを直さうといふのである。日蓮上人の戰は防ぎ戰である。法華經を護る爲の戰である。ここを誤解してはいけない。それをどうも後になつて來ると思ひ違へて、日蓮上人が先に立つて他の人を押除けることをやつたと言ふ。日蓮宗の中にも隨分さう言ふのが多い。俺は法華だから他のものをやつつけた、救世軍を追ひ散して好い氣持だ……まるで喧嘩になつてしまふ。これで日蓮上人の眞似をした積りで居るが、日蓮上人のは防ぎ戰である。法華經を弘めようとして他を攻擊する。人の間違ひを直さうといふところからいろいろ議論をされるのであります。

ところがその中に於て一番勢力のあつたのは念佛であります。だから立正安國論に於ては主として念佛は佛の御精神と違ふといふことを說いて居るのであります。後に至つて日蓮上人は佐渡に行かれ身延に引込まれたが、その頃になると主にお弟子を相手に教を說いて居られますが、その時になると眞言といふものは殊に深いものであります。だから、眞言の批判が主になつて居ります。日蓮上人の前後を見ますと、初めは念佛の批判が主であり、後になると眞言の批判が主になつて居ります。それは念佛の批判を主にするのは世間を相手にする、眞言の批判を主にするのはお弟子に教へる、そこに違ひがあるのであります。それを心得なければならぬ。世間には眞言の教義などは難かしいから辨へて居る者は無い、併し念佛なら世間に直ぐ解る。阿彌陀樣を頼みさへすれば極樂に行けると言ふのだから、世間を相手にする時には、念佛は取るに足らぬ、やはり法華經でなければいかぬといふことを主に說かれるのであります。

さういふやうな關係から立正安國論もこれから讀んで參りますと分りますが、主として念佛といふものでは本當に末の世は救はれない、やはり佛樣の魂を打込まれた法華經といふものでなければならぬといふことを明かにする爲に說かれた、さうしてその法華經の內容にまでは深入りして居りませぬ。武家に對して、間違つた信心をして居れば國は潰れるぞ、しつかりしなければならぬぞといふことを警告されたものと見て宜しい譯であります。隨つてそこに國を憂ふるといふ、世の末を案ずるといふ上人の懸ゆるやうな御心持が自ら現はれて居る譯であります。さういふ意味から言つて今のやうな時代に私共宗教といふものと國の運命といふものと離れることの出來ないといふ立場から、これを讀んで見ることが自分の爲にも宜いし、又世の中に對しても何かの役に立つだらう、斯う思つてこれから讀まうといふのであります。

（第一講了）

安政の大獄に斃れた人は、いづれも一とかどの人物であつたが、其の中で吉田松陰と橋本左内とは最も拔群の二明星であつた。時に松陰は三十歳、左内は二十六歳。世間的には松陰の方が能く口にされるが、併し其の至純至誠の情に於て、精力意志の絕倫なるに於て、高遠卓越せる識見に於て殆んど甲乙は見ないであらう。西郷南洲が「先輩に於ては藤田東湖に服し、同僚に於ては橋本左内に服す、二子の才學卷識、登に吾輩の企て及ぶ所ならんや」といつたのは、景岳二十二歳始めて相逢ふた時の述懷であつた。身長凡く五尺、白皙纖麗婦女の如き外貌で、而かも一度口を開けば雄力鋭利、善く國家經綸の大策を劃し純忠至孝、行履嚴正の第一人者であつた。將軍は二葉より芳ばしといふが、十五歳の時に書き記した「啓發錄」は、少青年のみならず特に現代產業戰士等への是好良藥と信じて爰に掲げることにした。殆左内のかゝる人格の據て來る處は實に修養と道念の篤いたまものである。然彼は福井の舊藩本丞善慶寺にあり、又產湯の井戸が同市專念寺境内に在る等、佛緣深重なるを憶ふ、

啓發錄

去雜心

雜心トハヲサナ心ト云事ニテ、俗ニイフワラベシキコト也。果菜ノ類ノイマダ熟セザルヲモ雜トイフ。雜トハスベテ水タヾキ處アリテ、物ノ熟シテ旨キ味ノナキヲ申也。何ニヨラズ雜トイフコトヲ離レヌ間ハ、物ノ成リ揚ル事ナキナリ。人ニ在テハ竹馬・紙鳶・打毬ノ遊ビヲ好ミ、或ハ石ヲ投ゲ鳥ヲ捕フヲ樂ミ、或ハ諸業・疏菜・甘旨ノ食物ヲ貪リ、怠惰安逸ニ耽リ、父母ノ目ヲ竊ミ、藝業職務ヲ懈リ、或ハ父母ニヨリカヽル心ヲ起シ、或ハ父兄ノ嚴ヲ憚リテ、兎角母ノ膝下ニ近ツキ隱ル、事ヲ欲スル類ヒ、皆幼童ノ水タヾキ心ヨリ起ルコトニシテ、幼童ノ間ハ強テ責ルニ足ラネドモ、十三四ニモ成リ學問ニ志シ候上ニテ、此心毛ホドニテモ殘リ有之時ハ、何事モ上達致テズ、迚モ天下ノ大豪傑ト成ル事ハ叶ハヌ物ニテ候。源平ノ頃並ニ元亀天正ノ間マデハ、隨分十二三歳ニテ母ニ訣レ、父ニ暇乞シテ初陣ナド致シ、手柄功名ヲ願ハシ候人物モ有之候。此等ハミナ雜心ナキ故ナリ。モシ雜心アラバ親ノ臂ノ下ヨリ一寸モ離レ候事ハ相成申間敷、マシテ手柄功名ノ立ツベキヨシハコレナキ義ナリ。且又雜心ノ害アル譯ハ、雜心除カヌ時ハ士氣振ハヌモノニテ、イツマデモ腰拔士ニナリ居リ候モノニテ候。故ニ予雜心ヲ去ルヲ以テ士ノ道ニ入ル始ト存候ナリ。

振氣

氣トハ人ニ負ケヌ心立アリテ、耻辱ノコトヲ無念ニ思フ處ヨリ起ル意氣强ノ事也。振トハ折角自分ト心ヲ止メテ振立振起シ、心ノナマヲ治斷セヌ樣ニ致ス義ナリ。此氣ハ生アル者ニハ皆アル者ニテ、禽獸ニサヘ有之テ、禽獸ニテモ甚シク氣ノ立タル時ハ、人ヲ害シ、人ヲ苦シムルコトアリ。マシテ人ニ於テオヤ。人ノ中ニテモ士ハ一番此氣强ク有之故、世俗ニコレヲ士氣ト唱ヘ、イカ程年若ナ者ニテモ、兩刀ヲ帶シタル者ニ不禮ヲ不致ハ此士氣ニ長レ候事ニテ、其人ノ武藝ヤ力量ヤ、位職ノミニ長レ候ニテハ無之。然ル處太平久敷打續、士氣柔弱依賴ニ陷リ、武門ニ生レ乍ラ武道ヲ忘却致シ、位ヲ望ミ女色ヲ好ミ、利ニ走リ勢ニ附ク事ノミヲフケリ候處ヨリ、右ノ人ニ負ケヌ耻辱ノコトハ堪ヘヌト申ス雄々シキ丈夫ノ心、挫ケナマリテ、腰ニコソ兩刀ヲ帶スレ、太物包ヲ擔ギタル商人、籠ヲ荷ヒタル樵拾ヒヨリモ劣リテ、纔ニ冒ノ塵ヲ拂キ犬ノ吠ニルヲ聞テモ、鈍步スル事トハ成ニケリ。偖々可嘆之至ニコソ。然ルニ今ノ世ニモ猶未ダ士ヲ貴ビ、町人百姓抔、御士樣ト申唱ルハ全ク士ノ士タル處ヲ貴ビ候ニテハ無之、我君ノ御威光ニ畏服致シ居候故、無撓鋭ノミヲ敬ヒ候コトナリ。其證據ハ昔ノ士ハ、平世ハ鎗劍持チ土タジリ致居候得共、不斷ニ耻辱ヲ知リ人ノ下ニ屈セズ心進シキ者故マサカ事有ル時ハ、吾大御帝或ハ將軍家抔ヨリ、奏リ召寄セラレ候ヘバ、忽チ鎧兜打揷テ物具ヲ帶シテ、千百人ノ長トナリ、虎ノ如ク狼ノ如キ軍兵バラヲ指揮シテ、臂ノ指ヲ使フ如ク致シ事成レバ芳名ヲ青史ニ垂レ、事敗ルレバ屍ヲ原野ニ曝シ、富貴利達死生悲離ヲ以テ其心ヲカヘ申サズ、大勇猛大剛强ノ處有之故、人々其心ニ感ジ、其義勇ニ長候ヘ共、今ノ士ハ勇ハナシ義ハ薄シ、謀略ハ足ラズ、迚モ千兵萬馬ノ中ニ切リ入リ、縱横無碍ニ馳廻ル事ハ叶フマジ。況ンヤ帷幄ノ内ニ在リテ運籌決勝之大勳ハ望ムベキ所ニアラズ、サスレバ若シ腰ノ兩刀ヲ奪ヒ取候ヘバ、其心立其分別、遂ク町人百姓ノ上ニハ出申マジ。百姓ハ平生骨折ヲ致居リ、町人ハ常ニ職業渡世ニ心ヲ用ヒ居候故、今若シ天下ニ事アラバ、手柄功名ハ却ツテ町人百姓ヨリ出デ、福島左衛門大夫、片桐助作、井伊直政、本多忠勝等ガ如キ者ハ、士ヨリ出申デザルベキカト思ハレ、誠ニ嘆カハシタ存ズル、箇樣ニ覺ノナキモノニ、高祿重位ヲ被下平生安樂ニ養成置候ハ、偖々君恩ノ程申ス限リナキコト、殊ニハ豊シ難シ、其御高恩ヲ蒙リ乍ラ、不覺ノ士ノミニテ、マサカノ時ニ我君ノ恥辱ヲナセマシ候テハ、返ス返ス恐入候次第ニテ、實ニ寐テモ目モ合ハズ喰テモ食ノ咽ニ通ルベキ筈ニアラズ、殊更我先祖ハ國家ヘ率對聊ノ功モ可有之候得共、其後ノ代々ニ亙リテハ、皆々手柄ナシニ恩祿ニ浴シ居候義ニ候ヘバ、吾々共聊カニテモ學問ノ筋心掛ケ、忠義ノ片端モ小耳ニ挾ミ候上ハ、何卒一生ノ中ニ粉骨碎身シテ、露滴程ニテモ御恩ニ報ヒ度事ニテ候。此忠義ノ心ヲ捷マズ引立、後邊リ致サヌ樣ニ致候ハ、全ク右ノ士氣ヲ引立振起シ人ノ下ニ安ゼヌト申ス事ヲ忘レヌコト肝要ニ候。乍去只此氣ノ振立候而已ニテ志立ヌ時ハ、折節氷ノ解ケ、醉ノサムル如ク、後邊リ致ス事有之者ニ候故ニ、氣一旦振立候ヘバ方々志立候事甚大切ナリ。

立志

志トハ心ノユク所ニシテ、我心ノ向ヒ趣キ候處ヲイフ。士ニ生テ忠孝ノ心ナキ者ハナシ、忠孝ノ心有之候テ、我君ハ御大事ニテ、我親ハ大切ナル者ト申ス事、聊ニテモ合點ニキ候ヘバ、必ズ我身ヲ愛重シテ、何卒我コソ弓馬文學ノ道ニ達シ、古代ノ聖賢君子英雄豪傑ノ如ク相成、君ノ御爲ニ働キ、天下國家ノ御利

益ニモ相成候大業ヲ起シ、親ノ名マデモ揚テ、醉生夢死ノ者ニハナルマジト直ニ思付候者ニテ、此卽志ノ發スル所也、志ヲ立ルトキハ、此心ノ向フ所ヲ能度相定、一度右ノ如タ思諾候ヘバ彌切ニ其向キヲ立テ、常々其心持ヲ失ハヌ樣ニ持コタヘ候事ニテ候、凡志ト申ハ、書物ニテ大ニ發明致シ候カ、或ハ師友ノ講究ニ依リ候カ、或ハ自分患難憂苦ニ迫リ候カ、或ハ憤發激勵致シ候カノ處ヨリ立テ定リ候者ニテ、平生安樂無事ニ致シ居リ心ノタルミ居候時ニ立事ハナシ。志ナキ者ハ魂ナキ軀ニ同ジ、何時迄立チ候テモ丈ケノ伸ブル事ナシ。志一度相立候ヘバ、其以後ハ日夜逐々成長致シ行キ候者ニテ、萌芽ノ草ニ膏壤ヲ與ヘタルガ如シ。古ヨリ俊傑ノ士ト申候人トテ、目四ツ、口二ツ有之ニテハナシ。皆其志大ナルト遥シキトコヨリ、遂ニハ天下ニ大名ヲ揚候ナリ。世上ノ人多クハ碌碌ニテ相果候ハ他ニ非ズ、其志太タ遥シカラヌ故ナリ。志立タル者ハ恰モ江戸立ヲ定メタル人ノ如シ。今朝一度御城下ヲ蹈出シ候ヘバ、今晩ハ今社明夜ハ木ノ下ト申ス樣ニ、逐々先ヘ先ヘト進ミ行申候者也。譬バ聖賢豪傑ノ地位ハ江戸ノ如シ、今日聖賢豪傑ニ成ラン者ヲト志シ候ハヾ、明日明後日ト段々ニ其聖賢豪傑ニ似合ハザル處ヲ取去リ候ヘバ、如何程短才劣識ニテモ、遂ニハ聖賢豪傑ニ至ラヌト申ス理ハ無之、丁度足弱ナ者デモ、一度江戸行キ極メ候上ハ、寛ニハ江戸マデ到着スルト同ジ事ナリ。偖右樣志ヲ立候ニハ物ノ筋多タナルコトヲ嫌ヒ候。我心ハ一道ニ取極メ置キ不申候ハヾハ、戸締リナキ家ノ香スルゴトタ、盜人ヤ犬ガ方々ヨリ起ビ入リ、迚モ我一人ニテハ香ハ出來ヌナリ。マダ家ノ香人ハ隨分俳人モ出來候得共、心ヲ一筋ニ致シ、守リヨタスベキ事ニコソ兎角少年ノ中ハ、人々ノナス事、致ス事ニ目ガチリ、心ガ迷ヒ候テ、人ガ詩ヲ作レバ詩、文ヲカケバ文、武藝トテモ、朋友ニ槍ヲ稽出ス者アレバ、我今日マデ習ヒ居タル太刀業ヲ止テ槍ト申ス樣ニ成リ度キモノニテ、コレハ正覺取ラヌ第一ノ病根ナリ故ニ先ヅ我知識聊ニテモ開キ候ハヾ、第ト我心ニ計リ、吾所向所爲ヲサダメ、其上ニテ師ニツキ友ニ謀リ、吾及ハズ足ハヌ處ヲ補ヒ、其極メ置タル處ニ心ヲ定メテ、必多端ニ流レテ多岐亡羊ノ失ナカランコト願ハシク候。凡テ心ノ迷フハ、心ノ幾筋ニモ分レ候處ヨリ起リ候事ニテ、心ノ紛亂致シ候ハ、吾志未ダ一定セヌ故ナリ。志定マラズ心牧マラズシテハ聖賢豪傑ニハ成ラレヌモノニテ候。何分志ヲ立ル近道ハ、經書又ハ歴史ノ中ニテ吾心ニ大ニ感激致シ候處ヲ書拔キ、壁ニ貼シ置キ候カ、又ハ扇抔ニ認メ置キ、日夜朝暮夫ヲ認メ眺ヒ、吾身ヲ省察シテ其不及ヲ勉メ、其進ヲ樂ミ居リ候事肝要ニシテ、志既ニ立候時ハ、學ヲ勉ムル事ナケレバ、志彌フトタ遥タナラズシテ、動モスレバ聰明ハ前時ヨリ減ジ、道德ハ初ノ心ニ惰ル樣ニ成リ行タモノニテ候。

勉學

學トハナラフト申ス事ニテ、總テヨキ人、スグレタル人ノ善キ行、善キ事業ヲ述付シテ習ヒ參ルヲイフ。故ニ忠義孝行ノ事ヲ見テハ直チニ其人ノ忠義孝行ノ行爲ヲ慕ヒ、傚ヒ吾モ能度其人ノ忠義孝行ニ負ケズ劣ラズ勉メ行キ候事、學ノ第一義ナリ。然ルヲ後世ニ至リ字義ヲ誤リ、詩文ヤ讀書ヲ學ト心得候ハ笑カシキ事共ナリ。詩文ヤ讀書ハ右學問ノ具ト申スモノニテ、刀ノ鞘ヤ二階ノ階梯ノ如キモノナリ。詩文讀書ヲ學問ト心得候ハ恰モ鞘ヲ刀ト心得、階梯ヲ二階ト存候ト同ジ。淺薄粗鹵ノ至リニ候。學ト申スハ忠孝ノ筋ト文武ノ業トヨリ外ニハ無之、君ニ忠ヲ竭シ親ニ孝ヲ盡スノ眞心ヲ以テ、文武ノ事ヲ骨折勉强致シ御治世ノ時ニハ御側ニ被召使候ヘバ、君ノ御遇ヲ補ヒ匡シ、御德ヲ彌增ニ盛ンニナシ奉リ御役人ト成リ候時ハ、其役所役所ノ事首尾能ク取修メ、依怙偏負不致、賄賂諸謝ヲ不受、公平廉直ニシテ其一局何レモ其感ニ畏レ、其德ニ懷キ候程ノ仕事ヲナシ可申義ヲ平生ニ心掛ケ居リ、不幸ニシテ亂世ニ逢ヒ候ハヾ、各々我居場所ノ任ヲ果シテ寇賊ヲ討平ゲ、禍亂ヲ克定メ可申、或ハ太刀槍ノ功名粗打ノ手柄致シ、或ハ陣屋ノ中ニアリテ謀略賛畫シテ、敵ヲ屢ニシ、或ハ兵糧小荷駄ノ率行トナリテ萬兵ノ氣渴不致兵力ノ不減樣ニ心配致シ候事抔、彼々修練可致義ニ候。此等ノ事ヲ致候ニハ、胸ニ古今ヲ包ミ、腹ニ形勢機略ヲ藏シ藏メ居ラズシテハ叶ハヌ事共多タ候ヘバ、學問ヲ專務トシテ勉メ行フベキハ、讀書シテ吾知識ヲ明カニ致シ、吾心膽ヲ練リ候事肝要ニ候。然ル處年少ノ間ハ兎角打續キ業ニ就キ居リ候事ヲ厭ヒ、怠讀怠習シ、怠習文怠講武トイフ樣ニ、暫タ宛ニテ倦怠致スモノナリ。此甚ダ不宜、勉ト申スハ力ヲ推究メ、打續キ推遂候處ノ氣味有之字ニテ、何分久ヲ積ミ思ヲ詰メ不申候ハヾハ萬事功ハ見エ不申候。マシテ學問ハ物ノ理ヲ說キ筋ヲ明カニスル義ニ候ヘバ、右ノ如タ輕怠粗鹵ノ致シ方ニテ眞ノ道義ハ見エ不申、中々有用實着ノ學問ニハナリ申サヌナリ。且又世間ニハ蠱俗多タ候故、學問ヲ致シ候ト、兎角傲慢ノ心起リ、浮調子ニ成テ、或ハ功名富貴ニ念動キ、或ハ才氣聰明ニ伐リ度キ病折々出來候モノニテ候。コレヲ自ラ愼ミ可申ハ勿論ニ候ヘ共、玆ニハ良友ノ親驚至テ肝要ニ候間、何分交友ヲ擇ミ、吾仁ヲ輔ケ吾德ヲ足シ候工夫可有之候。

擇交友

交友ハ吾連朋友ノ事ニテ、擇トハスグリ出ス意ナリ。吾同門同里ノ人、同年輩ノ人、吾ト交リタレ候ヘバ、何レモ大切ニスベシ。乍去其中ニ損友益友候ヘバ、則擇ト申ス事肝要ナリ。損友ハ吾ニ得タル道ヲ以テ、其人ノ不正ノ事ヲ矯直遣ス可タ、益友ハ吾ヨリ親ヲ求メ事ヲ詢リ常ニ兄弟ノ如タスベシ。世ノ中ニ益友程難有難得者ハナタ候間、一人ニテモ有之バ何分大切ニスベシ。總テ友ニ交ルニハ飲食歡娛ノ上ニテ附合、遊山釣魚ニテ狎合候ハ不宜、學問ノ講究、武事ノ練習、士タル志ノ研究心合ノ吟味ヨリ交ヲ納レ可申事ニ候。飲食遊山ニテ狎合候朋友ハ、其平生ハ驕リ昂リ肩ヲ拍チ、互ニ知己ト稱シ居候ヘ共、無事ノ時吾德ヲ補フニ足ラズ、有事ノ時吾危難ヲ救ヒタレ候者ニテハナシ。コレハ成リ丈ケ屢出會不致、吾身ヲ嚴重ニ致シ附合候テ必ズ狎昵致シ、吾道ヲ褻サヌ樣ニシテ、何トカ工夫ヲ凝シテ、其者ヲ正道ニ導キ武道學問ノ筋ニ勵メ込候事友道ナリ。偖益友ト申スハ、兎角氣遣ナ物ニテ、折々不面白事有之候、夫ヲ慮ト了簡致スベシ。益友ノ吾身ニ補ヒアルハ、全タ其氣遣ナル所ニテ候、士有學友難無道不失令名ト申スコト經ニ有之候。學友トハ卽益友也、吾過ヲ告知ラセ、我ヲ規彈致シタレ候テコソ吾氣

ノ付カヌ處ノ落チ欠モ補ヒタシ候事相叶候ナリ、若シ右ノ益友ノ意見ヲ據と候時ハ、天子諸侯ニシテ諫臣ヲ御疎ミナサレ候同様ニテ遂ニハ刑戮ニモ罹リ不測ノ禍ヲモ招ク事アルベキナリ。偖益友ノ見立方ハ、其人剛正毅直ナルカ、温良篤實ナルカ、豪壯英果ナルカ、俊邁明亮ナルカ、寛達大度ナルカノ五ニ出デズ。此等ハ何レモ氣達多キ人ニテ、世間ノ俗人共ハ甚ダシク厭案致シ居候者ナリ、後損友ハ佞柔善媚、阿諛逢迎ヲ旨トシテ、浮誕辯慧、輕忽粗慢ノ性質アル者ナリ。此ハ何レモ心安ク成リ易キ人ニテ、世間ノ女子小人トモ其才智ヤ人品ヲ警居候者ナレ共、聖賢夢傑タラレト思フ者ハ、其所擇自ラアル所アルベシ。

以上五目少年學ニ入ルノ門戸ト心得書聯申候者也。

右予嚴父ノ教ヲ受ケ、常ニ書史ニ渉リ候處、性質疎直ニシテ柔慢ナル故、遂ニ進學ノ期ナキ樣ニ存ジ、毎夜臥衾中ニテ涕泗ニムセビ、何卒シテ吾身ヲ立テ、父母ノ名ヲ顯シ、行々君ノ御用ニモ相立、祖先ノ遺烈ヲ世ニ輝シ度ト存居候折柄遂々吾身ニ解得致シ候事共有之候樣覺申スニ付聯カ書記シ後日ノ遺忘ニ備フ。敢テ人ニ示ス處ニアラズ。嗚呼如何セン、吾身刀圭ノ家ニ生レ、醫技ニ局々トシテ吾初年ノ志ヲ遂ル事ヲ不得ヲ。然レ共所業ハ此ニ在ラテモ所志ハ彼ニ在候ヘバ、後世吾心ヲ知リ吾志ヲ繼ミ吾道ヲ信ズル者アラン歟。

嘉永戊申季夏

橋本左内誌

記事

本部園報

大詔奉戴記念　本年の八月七日はソロモン血戰第一周年なるを想到して無量の感激にひたる。帝都の士女は果して新聞紙の報ずる以上の死鬪の眞相を洞察して居るか否は大に疑問とする。八月の都人士の動き即ち家族連れの海水浴や、健脚を誇る登山連其他交通機關の大混雜を目擊しては眉をひそめざるを得ない。空襲必至を叫びつゝ手奪にせる家庭は無かつたか。車中で鏡を取出したり、ベラ〳〵した服裝に綱の手袋をはめた若い婦人、此等は獨り帝都に於てのみ見受ける、歡樂境の盛賑振りや料理店の大繁昌、酔歩蹣跚の產業戰士、嗚呼、これで蹇天善神は此國を護られようか、幾分でも決戰の苛烈、悲壯の實況を窺ふならば翻然として襟を正さずには居れまい。帝都附近は本年特に野菜類に惠まれてゐながら、猶且つ買出しの部隊がある方面には狂逆して吾人の活動を妨ぐこと夥しい。諺曰、　故郷にして五欲に著し惡道の中に墮ちなん」と、又曰「種々の方便をもつて衆生を引導して諸の著を離れしむ」と。南方の現住民は茅屋に裸一貫で、野生の果實に生活しつゝも而も六尺豐かの筋骨隆々たる體軀を保有してゐる。内地でも東北のある地方では生れてからお米一粒も口にせんで、猶且つ堂々たる健康體で精力絶倫である。そこらの人が一羽十金を投じて雛鶏を冷藏庫に蓄へながら、わかもと依存とは靈肉の差である。畢竟人格の問題を忘れては眞事休矣。複雜微妙の動向を洞れる世の實相を徹底して悟道遊ばした教主釋尊を仰ぎ、その慈諭に吾人の永き眠より覺醒して、至誠一貫忠孝の實踐を勵む所に信仰がある。信仰と生活は不離である。信仰なき生活は墮落である。毛利元就は信仰强盛な者を最前線に配陣せしめて好績を獲得した、信仰は力である。今や勝ち拔く爲に上下一致して强信に立つべきを痛感する。

此の大詔奉戴の記念日早朝の清樂に於て、一同は登い祈りと英靈の遊覽を參して後、磯部理事より「南大平洋の戰果」に就ての血湧肉躍る節子唄があつた。

信行會　涅槃經に「信ありて解なければ無明を增長し、解ありて信なければ邪見を增長す、信と解と圓通して行の本と爲る」と示されてゐるが、全く此の通りである。然るに今は宗教を理解しない者が大多數である。最近にも或人が「日本ではすべての宗教が　天皇陛下に歸一し奉るのだ、陛下が特別の思召をもつて靖國へお祀りになる英靈の公葬は、たとへその先祖が佛壇に納まつてゐても、構はず神式にしてよろしいと思ふ……僧侶でも應召すれば軍服を着る。いくら佛の子でも軍人となれば、陛下に差上げたのだから死んでも佛の手に取戻すに及ぶまい」と申してゐる。畏くも　天皇樣を宗教の中樣に奉ずるといふことが、却て大不敬であることを氣付かない。斯の如き徒輩が一パイ居る。大體宗教といふものが如何なる道法であるかを知らず唯現世利益を祈るとか、死人のお葬ひするのが宗教と思つてゐる。ソンナものは宗教の黴である、正しい宗教はこの大宇宙の無窮の實相を明示し、超人觀・人身觀を教へて人類文化の一大要素をなすものだ位の、せめて大綱丈けは握つてゐて貰ひたいものである。超人觀が信解されたならば、天皇本尊といふやうな不敬問題も起らない。殊に今更日本人として　御皇室をお引合ひにしなければ民心の統一が保てないやうでは情けないではないか。日本人たるものは生れながらにして既に傳統的に所謂民族性として、忠誠の血で五體を構成してゐるものである。それが歌禾崇拜の風にあほられてから、此の淨い珠に塵がかゝつたからして、日本精神だとか、國體明徵だとか叫ぶに至つた寧ろ憤嘆すべきことである。人の心は家屋敷と同じやうに、朝夕掃除せないと塵埃に汚される。いつも明教によつて磨かれねば本心は居睡して、頑愚がのさばるもの。ある。故た人身觀を習學すれば、巧利主義だとか、出世主義だとかに執れず、貪瞋痴の三毒も淨化され菩提化する。そこには理想の文化が輝くであらう。自分といふものがどうして生れて來たのか、又死んで後さう簡單に佛になるものか否の問題も、本因本果を知らねば斷定は出來まい。世の中に闇取引が行はれることも因果を辨へないからのことであり、現在の幸不幸も將來の浮沈も皆自らの行爲に基くことを理解するならば、大に菩薩行に精進せねばならぬといふことになり、それにはわが心の命ずるまゝといふやうな、自墮落のことでなく、立派なお手本を前にして所謂篤敬三寶といふことに依つて人格は向上する。「菩提心は則ち大道たり、能く一切智の城に入ることを得せしむるが故なり。信は

法藏第一の財たり、清淨の手となりて業行を受く」と華嚴に說かれてゐる。產業の增進も、戰力の强化も、一億一心の實もすべての行は信を以て首と爲す。寔に信は業德の根本である。

毎月曜日の早朝、時代を荷負せる若人等が、國祚第一の大本尊の御前に於て、至心に勤修精進して後、信仰の根本に觸れての研鑽を勵み、聖祖の三大誓願に感えたつ、盛夏も殘暑ものゝ數でない、道火炎々として中天に昇る。

福島教信

町の會 八月はお盆の月であり、五日は全市公葬の營まれた意義深い日、磯部先生は御不自由の足もお厭ひなく、御出講下さつた。今月は華嚴の略說で、理論よりも教行人理異の五法によつて信仰の有難い事を、お經文に照し、又本多上人の學風によつて懇ろにお話し下さつた。「淨き日の千光を放つが如き、本處を動ぜずして十方を顯らす、佛日の光明も亦是の如し、去無く來無くして世間を除きたまふ」かゝる一偈でも心靜かに拜讀する時、無限の教訓を與へられる。

「佛法は行を貴ぶ、不行を貴ばず、但能く勤め行ずれば、たとひ復寡聞なるも亦先ちて道に入る」と龍樹菩薩は仰せられた通り、八萬四千の數多い法門も畢竟すれば忠と孝を說かれたものである。これを如何に力强く履行せしめるか、そこに信仰を基礎とするのである。「若し信根を離るれば、心劣り憂悔して功行具らず」の一句は嚴として肌に栗を生ずる。今の時必勝の金鍵は、國民の人格にあるでせう、この人格向上は須らく正しい宗教の信仰からであるを思ふて、お互は益々道念策勵に勝うちつ進みたいと誓願して十時頃お別れした。

團費誌料維持費及寄附金領收（自七月二十一日至八月二十日）

一金　參　圓也　横濱　川又志郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　伊藤貞一殿
一金貳圓五拾錢也　福岡　平尾加代殿
一金　五　圓也　東京　山根日東殿
一金　五　圓也　大原きね殿
一金貳圓五拾錢也　同　矢崎虎夫殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　荒木蓮成殿
一金　拾　圓也　東京　野間藏十郎殿
一金　參　拾　圓也　同　平井三造殿
一金　拾　圓也　神戸　近津聖學殿
一金　拾　圓也　東京　鈴木秀學殿
一金壹圓貳拾錢也　同　本海宮次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　川村驛善殿
一金貳圓五拾錢也　福島　川村一郎殿
一金六圓六拾錢也　小田原　三橋會要殿
一金貳圓貳拾錢也　甲府　高野毅殿
一金　貳　圓也　東京　越山峰四郎殿
一金貳圓五拾錢也　同　須藤仙吉殿
一金　拾　圓也　横濱　小高了海殿
一金　參　拾　圓也　高岡　賀久嘉藏殿
一金　五　拾　圓也　北支　種村五郎殿
一金貳圓五拾錢也　東京　甘樂清吉殿
一金貳圓五拾錢也　同　納富康之殿
一金　八　拾　圓也　同　井上道太郎殿

右雜有入帳仕候也（以是領收証代用）

財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄　改版特價　金壹圓九拾錢
法華經要義　賜天覽　同　金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓　同　金壹圓五拾錢
日蓮主義精要　同　金　參　圓
法華經要品　同　金　五　拾　錢
本尊意識に就て　同　金貳拾錢
法華經の心髓　同　金壹圓五拾錢
黎明の原理　同　金　五　圓
送料實費

磯部講師講演
本多日生上人　特　價　金壹圓七拾錢
勤行作法　同　金　拾　錢
佛教の心髓　同　金　壹　圓
送料實費

河合諦明著
皇道と日蓮主義　定價金壹圓
送料實費

東京都小石川區晉羽町六ノ十七
財團法人統一團出版部
振替東京九四二〇番

一部一定價　一冊　參　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
○御申込ハ總テ前金ノ事
○前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
○特殊ノ場合ハ必ズ新聞共ニ御通知ノ事

昭和十八年八月二十七日印刷納本
昭和十八年九月一日發行
（第五百八十二號）

東京都小石川區晉羽町六ノ十七
編輯兼發行人　磯部滿事
東京都四谷區內藤町一
印刷人　山田英二
東京都小石川區晉羽町八ノ十一
印刷所　野島好文堂印刷所
東京二〇五二

（不許複製）

東京都小石川區晉羽町六ノ十七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

統一

明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十八年八月二十七日第三種郵便物認可
昭和十八年九月一日發行（毎月一回一日發行）

第五百八十二號

第四十八年　九月號

明治三十年十二月二十四日第三種郵便物認可
昭和十八年九月二十七日第三種郵便物認可
昭和十八年十月一日發行（毎月一回一日發行）

第五百八十三號

目次

大師號宣下に就て……本多日生
立正安國論講話（第二講）……小林一郎
本佛實在の宗教哲學（廿七）……河合陟明
記事
○本部圖報　○福島教信　○入帳報告

第四十八年　十月號